



苫小牧再発見!!



Rediscovering TOMAKOMAI



はじめに

苦小牧市長 岩倉博文

苦小牧市は太平洋と樽前山のふもとに広がる広大な森林や湖沼など、緑に恵まれた自然豊かな環境にあります。このすばらしい環境の中で、文化の薫り高く潤いのある市民生活を実現するために、市では文化芸術の振興を図るとともに、文化財の保存活用などに努めております。

この度、平成19年8月から平成22年10月に「広報とまこまい」で連載された「苦小牧再発見!!」を一冊にまとめました。本市の歴史や風土、自然を知っていただく一助となればと考えております。また、新たに郷土苦小牧の様々な文化を発見していただければ幸いです。「苦小牧再発見!!」の作成に当たっては、苦小牧市の文化を守り育み、創造しておられる多くの皆様のご協力をいただきました。ここに、改めて感謝の意を表します。

苦小牧再発見!! 目次

はじめに	苦小牧市長 岩倉博文	1
第1回	八王子千人同心	3
第2回	王子軽便鉄道	4
第3回	苦小牧の語源について	5
第4回	市の貝「ホッキ貝」	6
第5回	スケートのまち苦小牧	7
第6回	苦小牧港について	8
第7回	ウトナイ湖のマガン	9
第8回	樽前山熔岩円頂丘	10
第9回	林重右衛門墓碑	11
第10回	霧のまち苦小牧	12
第11回	開拓使美々鹿肉缶詰製造所跡	13
第12回	ハスカップ	14
第13回	開拓使三角測量勇払基点	15
第14回	市の鳥「ハクチョウ」	16
第15回	苦小牧の大火	17
第16回	宇宙ステーションミール	18
第17回	ブロンズ像「緑の環」	19
第18回	アイヌ丸木舟及び推進具	20
第19回	サケの上る川・錦多峰川	21
第20回	宮沢賢治と苦小牧	22
第21回	知られざるマツチ産業	23
第22回	工業のまち苦小牧の出発点	24
第23回	とまこまい港まつりの歴史	25
第24回	市営バス創業60周年	26
第25回	市の木「ナナカマド」	27

※この「苦小牧再発見!!」は、広報とまこまい(平成19年8月から平成22年10月)に連載したものをそのまま掲載しています。

苦小牧再発見!!

八王子千人同心

〜蝦夷地開拓移住隊士の墓〜

所在地 勇払132番地38



▲市民会館前にある「勇払原野開拓記念碑の千人同心顕彰碑」

勇払史跡公園内に、蝦夷地開拓移住隊士の墓として、苦小牧の開拓に尽くした八王子千人同心の墓があるのをご存じでしょうか。

八王子千人同心は、今から二百七年前の千八百年に蝦夷地を外国からの脅威から守るため、そして開拓のために武州八王子（現在の八王子市）から、組頭原半左衛門を隊長に弟新介を副士として同心子弟百人を伴って蝦夷地に入りました。半左衛門は50人を引き連れて白糠へ、新介は勇武津（現在の勇払）に入り警備、開墾などに従事しました。

さらに千人同心の河西祐助は原隊とは別に妻子を連れて勇払に入りました。この八王子千人同心が勇払に入

▲勇払史跡公園内にある
蝦夷地開拓移住隊士の墓



植した事が苦小牧市の開拓の第一歩となりました。

移住した同心たちは、過酷な自然環境などで不毛の原野の開拓は思うようにまかせず、2年目にして死亡する者16人、病にかかり帰郷するものを多数出し、入植4年目に中止となりました。

この勇払原野での先人たちの筆舌に尽くしがたい苦勞が、二百年の時を経た今日の苦小牧の礎となつていきます。

勇払史跡公園内には勇武津で亡くなった8人の千人同心と河西祐助の妻、梅の墓がまつられ、苦小牧開拓の先駆者として手厚く保護されています。

興味のある方は訪れて、私たちの住むまちの開拓に尽くした先人たちの熱き魂を感じ、苦小牧を再発見してみてはいかがでしょうか。



◀八王子千人同心関係者の墓石
河西祐助の妻梅の墓（右から2つ目）

苫小牧再発見!!



上干歳
第四号
第三号
第二号
第一号



▲王子軽便鉄道(山線)路線略図

山線機関車と苫小牧の近代化

苫小牧と支笏湖を結ぶサイクリングロードにかつて山線という愛称で呼ばれた王子軽便鉄道が走っていたことを保存してしようか。

軽便鉄道とは一般の鉄道より軌道が狭く、軽いレールを使い、車両も当時一般的に使用していたS1の約半分の大きさの小型の車両を用いた鉄道のことです。

苫小牧の近代化の第一歩である王子製紙が苫小牧に製紙工場を建設するにあたり、電力確保のために千歳川上流に発電所を建設する必要がありました。この山線は発電所建設のための資



◀ポーター製Cサドルタンク・テンダ機関車 No.3 (当時の姿)

材や工事関係者の輸送を目的に1908(明治41)年に作られました。発電所完成後は、製紙材料である原木の輸送などの重要な役割も果たし、また1922(大正11)年に一般乗

客の便乗が許可されたことで、支笏湖への観光客の乗車も増え、山線は大いに活躍しました。

戦後、自動車普及し始め、各地に自動車道路が建設されると、苫小牧支笏湖間にも1950(昭和25)年に道路が建設されました。自動車は輸送時間が大幅に短縮されるため、山線の存在意義が薄れ、1年後に惜しまれつつ全線廃止となりました。

廃止後約50年の時が経ちその痕跡はほとんど失われています。現在は王子製紙正門前のアカシア公園に山線機関車と貴賓車が保存され、山線の歴史を残す唯一の資料となっています。

小さな山線機関車が苫小牧の近代化に寄与したことを考えると、ふるさとの大きな歴史がこの小さな機関車に乗っていると



◀王子アカシア公園に保存されている橋本鉄工所製Cサドルタンク・テンダ機関車 No.4

苫小牧再発見!!



苫小牧の語源について

日常生活の中で「苫小牧」という住所を記載する機会はたくさんあると思います。田舎、何気なく書いている「苫小牧」の語源が何か存じでしょうか。

北海道の地名のほとんどはアイヌ語に由来し、先住民であったアイヌ民族によつて命名されたものです。苫小牧も他の多くの地名と同様にアイヌ語にその由来があります。

苫小牧の語源についてはさまざまな説がありますが、一説として、「トマコマイ」は「トマコマイ (to-makomai)」沼の付いているマコマイ川という説があります。「ト (to)」とはアイヌ語で沼、マク・オマイ (ma-koma-i) とは、山奥に・入っている・もの (川) の意味で、札幌の真駒内と同じといわれています。現在は土地の形状が変化していますが、その昔、以前

の樽前山神社 (矢代町) の付近から西の方へ細長い沼が続いており、冬はスケート場でした。その沼の東端は細流となってマコマイ川 (昔矢代町と幸町の間を流れていた苫小牧川) に注いでいました。そのため沼の付いているマコマイ川、すなわちトマコマイになったといわれています。

「トマコマイ」は幕末近くになつてよく使われるようになった地名であり、この地に漁家が立ちならぶようになつて次第に文献に登場するようになりました。初めは「トマコマイ」「トウマコマイ」あるいは「止麻古前」などと記されました。明治に入ってから「苫小前」「苫細」の漢字をあてて記されるようになりましたが、「苫小牧」と改称されたのは明治7年8月22日といわれています。

苫小牧に住んで、何気なく「苫小牧」と使っていますが、この地名には、アイヌ語が語源であるということ、昔のこのまちの土地の状態を表したものである事実が隠れているのです。



◀昭和31年地形図

苫小牧再発見!!



市の貝「ホッキ貝」



▲苫小牧の市の貝「ホッキ貝」
正式名称は姥貝(ウバガイ)

苫小牧市は、ホッキ貝の年間の水揚げ量が約800トンと全国一のまちです。また、地域の誇れる食材として学校給食にも採用されるなど、郷土の味として定着し、市では平成14年7月20日に「市の貝」に制定しています。

正式名称は姥貝(ウバガイ)ですが、北寄貝(ホッキガイ)と別名で呼ぶのが一般的となっています。これは、主に東北や北海道で水揚げされ、北に寄ったところで獲れるという意味や、ウバガイを指すアイヌ語の「ポクセイ(pok-sey)」が語源であると言われています。

ホッキ貝は10cmほどに成長する大型の2枚貝で、冷たい海水を好み、日本では関東以北から北海道の周辺に生息します。通常は海岸の砂底の中、15~30cm程砂に潜って暮らし、長い水管を延ばして水を吸い、そこ



◀熱を通すと黒褐色の部分が紅色に変わる

に含まれるプリンクトンを食べて成長し、寿命は30年以上です。漁は5月から6月までは産卵のため禁漁となりますが、それ以外はいつでも獲れます。特に2月から3月は卵を体内に抱えるために栄養が蓄えられ、冷たい海水で身がしまりおいしくなります。北海道海面漁業調整規則により、収穫できるホッキ貝は7.5cm以上のものと定められています。ですが、そこまで育つには約5年程かかります。

ホッキ貝は生でももちろん食べられますが、ホッキご飯、ホッキカレー、フライ、バター焼きなど用途が広い食材です。また、貧血予防に

役立つ鉄分や、血中コレステロールを下げるタウリンが豊富です。地元前浜で取れた栄養たっぷりの特産品ホッキ貝、ぜひ味わってみてはいかがでしょうか。



◀ホッキ漁は沖合い3~6mの海底にホースから海水を噴射して砂地を掘り、げた網で貝をさらう噴流式で行われる

苦小牧再発見!!



スケートのまち苦小牧



苦小牧は市内各地にスケートリンクがあり、年間を通してスケートが滑ることができます。そして、スケートのまちとして全国的に有名です。

苦小牧は道南に位置し、冬の季節風による降雪が少なく、根雪期間も短く、雪害も少ないまちです。また、もともと湿地帯であったことから、付近には大小無数の沼があるといった自然条件がスケートのまちとなった要因と考えられます。

古くは大正10年頃に、坊主山の沼(佐羽内沼)で王子製紙の職員たちがスケートを楽しんだ記録が残っています。苦小牧のスケートはこの頃から冬のスポーツとして大いに盛り上がりました。

大正末期に苦小牧工業高校にスケート部が設けられ、全道中等学校氷上競技大会に出場し、スピードスケートで優勝、ホッケーは決勝を引き分けの成績を

残しました。この活躍により、苦小牧のスケート熱も全道的なものとなり、大正15年には専用リンクを矢代町に新設しました。当時は遊戯施設や娯楽施設がなかったため、スケートは小学校で爆発的な人気となり、誰もが下駄スケートや氷上スケートをもって沼に集まりスケートを楽しむようになりました。

昭和6年になると王子製紙アイスホッケー部が結成され、翌7年には全日本選手権大会で優勝しました。昭和19年から21年までは戦時下体制により、各種競技会は中止となっていました。が、戦後、国内大会、国体、オリンピックなどで数多くの記録を残し、苦小牧のスケートも国際的なものとなりました。

苦小牧では大正時代からスケートが楽しめます。長い伝統と歴史があります。また、市内ではスケートをする環境が整っていますので、スケートのまち苦小牧で、冬の体力づくりとしてスケートに親しんでみてはいかがでしょうか。



◀スケートを楽しむ町民(昭和初期)

大正時代に使用していた下駄スケート▲

苫小牧再発見!!



苫小牧港について

く内陸掘り込み式港の築港への道のり



▲現在の苫小牧港全景

苫小牧は現在、港湾貨物取扱量北海道第1位で、北海道の物流拠点、そして国際的な港湾都市となりましたが、この苫小牧の港は内陸掘り込み式で、勇払原野を掘り込んで作られた港であることをご存じでしょうか。

苫小牧は明治当初イワシの地引き網漁が中心の漁村でした。大正時代になると漁の不振が続いたため、沖合漁に乗り出すために漁港築港を試みましたが、潮流の激しいところであったため失敗しました。1935(昭和10)年に漁港建設のため試験工事を行うが同様に失敗、また

1939(昭和14)年には北海道庁土木部による工業港湾として計画されるが、太平洋戦争により完全に頓挫しました。それでも当時の人たちが請願を続けた結果、石狩炭田の石炭の増産に伴い、

室蘭、小樽では積み出しが追いつかないという理由で、苫小牧の築港が決定しました。

1951(昭和26)年に苫小牧工業港起工式を行い約12年の時をかけて1963(昭和38)年に苫小牧港に第一船が入港しました。その後、1964(昭和39)年から工業港区の建設が行われ、現在の姿になりました。

苫小牧が港湾都市となるまでは、順調にことが運んだわけはありませんでした。明治以前は漁業を中心とする小さな村であったが、広大な勇払原野を港湾の建設により開発し、もって生活を良くしたい、もって立派なまちにしたいという先人たちの信念とたゆまぬ努力が、今日の苫小牧港を作り上げる原動力となったといえるでしょう。

◀開港前は馬で船を引き上げていた



◀昭和37年の建設工事中の様子



苦小牧再発見!!



ウトナイ湖のマガン



例年3月下旬になると、ウト

ナイ湖では約8万羽のガン類（マガン、ヒシクイ）が飛来するのを存じでしょうか。湖に来るガンは空一面に広がり、その風景は圧巻で、この時期が湖の最もにぎわつ季節になります。

中でも最も多く飛来するのはマガン（真雁）で、体長は65〜78cm、翼幅130〜165cmで白鳥とカモの中間の大きさの鳥です。雌雄同色で茶色、額が白く、脚部のオレンジ色が特徴です。

◀マガンの雁行 ^{かんこう} 雁の仲間は飛行するとき「雁行」と呼ばれる整然とした編隊を作り、鳴き交わしながら渡っていく



け、秋田県の八郎潟、ウトナイ湖、宮島沼（美唄市）へと移動し、シベリアへ帰っていきます。

生態は、シベリアなどのツンドラ地帯の河川や淡水の湖沼周辺で繁殖し、沼地の水生植物の葉や根茎、水田での落ち草

ミヤ草の葉などを採取する植物食です。

マガンは日の出になると湖を一齐に飛び立ち、昼間は周辺の畑などで採食し、日の入りとともに、夜を過ごす湖に一齐もどります。これを「ねぐら立ち」「ねぐら入り」といいますが、ねぐら立ちは6時から8時ごろ、ねぐら入りは17時から18時ごろとなっています。日によって時間がずれることがあるので、早めに行く必要がありますが、3月はこの状況を見る絶好の機会であり、一見の価値があります。

このウトナイ湖のマガンは、4月上旬から徐々に北へと去っていきます。この去っていくマガンの姿に緑の季節の到来を感じ、自然の中に季節の変化を知ることができるとは、野鳥の楽園ウトナイ湖ならではのようです。



▲ねぐら立ちの風景



◀字植苗の畑で採食するマガン

苦小牧再発見!!



樽前山熔岩円頂丘

よつがんえんちゆうきやう

苦小牧の市街地の北西約20km

に位置する標高1041mの樽前山は、苦小牧のシンボルとして誰もが存じの山でしょう。

その樽前山の山頂中央に、小さな山をつけたように飛び出して見えているものは、北海道の文化財(天然記念物)に指定されている熔岩円頂丘(ドーム)であることを知っていますか。

樽前山は那須火山帯に属する活火山であり、その噴火活動は、有史以前より数10回を繰り返しています。主な大噴火は、樽前山が生成された約9000年前、約3000年前、1667(寛文7)年、1874(元文4)年の4回となっています。

熔岩円頂丘は直径1200mの火口中央の火口丘に粘性の強いマグマが流出し、盛り上がり過ぎてきたもので、大変珍しいものです。始めは1867(慶応3)年に生成し、1874年(明治7)年の噴火で



崩落しました。現在山頂に見えるものは、1909(明治42)年4月17日から19日にかけて再び生成されたもので、当時は直径450m、体積2千万m³のドーム状をしていました。その後崩落し、頂部は平坦化して、現在は盃を伏せたような形をしています。ドームは学術的にも大変貴重なため1961(昭和36)年に市指定文化財になり、その後1967(昭和42)年に道指定文化財になりました。

樽前山は7合目まで車で行くことができ、そこから頂上まで50分とハイキング気分です。そのため、登山者には人気の山です。また、晴れた日は雄大ですばらしい姿を見せてくれますが、日常何気なく目に入る樽前山の山頂には、熔岩円頂丘という地底のマグマの力や火山の力を見ることが



▲苦小牧のシンボル樽前山
山頂中央に見えるのが熔岩円頂丘

◀近くから見た熔岩円頂丘
黒く硬化した熔岩で覆われている



苦小牧再発見!!

林重右衛門墓碑

所在地 字錦岡238番地7



▲林重右衛門墓碑全景
東屋の中に墓碑がある

苦小牧市字錦岡の国道36号線沿い、アルテンの入口にひっそりとある墓石は、市指定文化財の林重右衛門墓碑であり、かつて樽前浜がイワシ漁で栄えたことを現す石碑であることを存じてようか。

蝦夷地におけるイワシ漁は江戸時代の安永年間(1772~1781)に勇弘・白老海岸で開始されました。樽前浜では文政年間(1818~1829)にイワシ漁とイワシの×粕(肥料)の生産が盛んになり、安政6(1859)年には上等产品として全国的な名声を得ました。

×粕は5月~6月頃から前浜に押し寄せるマイワシを地曳網

で獲って作られ、勇武津・真小牧の東部では場所請負人が、小糸井・樽前の西部では漁業出稼人によって行われていました。

林重右衛門は、南部異国潤(現在

の青森県下北郡風間浦村)の人で、代々重右衛門を名乗り漁業に従事していました。享和元(1801)年に生まれ、天保3(1832)年に5代目を襲名し、その頃から樽前浜で網元として下北地方の出稼漁夫を指揮し、イワシ漁に活躍していました。7年後の天保10(1839)年9月10日樽前浜にて39歳の若さで病死しました。

この墓石は、箱館の場所請負人、井筒屋大橋久右衛門が、林重右衛門の霊を弔うために建立したもので、古い文献に残された江戸時代のイワシ漁の繁栄と、その事実を証明する墓碑です。

この地が約200年前イワシ漁で栄えた地であること、大勢の人が働いていた姿などを想像して、いにしえの苦小牧に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



◀墓碑の近景
中段に箱館の井筒屋の屋号が記されている



◀現在の樽前の浜の様子
イワシ漁で栄えた面影は今はない

苫小牧再発見!!

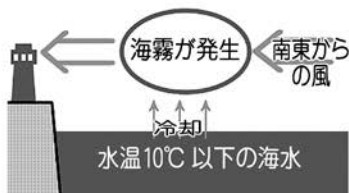
第10回

霧のまち苫小牧



▲海霧は親潮(千島海流)により南東の風が冷やされ発生する

◀海霧の発生メカニズム



苫小牧の気候は積雪寒冷の北海道にあつて、冬は降雪量が少なく、最低気温も氷点下10℃以下になることはあまりなく、全般に温暖な気候です。また、夏は25℃を越えることは珍しく、避暑地のように過ごしやすいのが特徴です。しかし、晩春から初夏にかけて特有の海霧がかかるのは皆さんご存じのことでしょう。この海霧はなぜ発生するのかを知っていますか。

日本列島付近では、これから真夏にかけて南東からの風が吹くことが多くなり、この風は高温多湿です。岩手県北部の北緯40度以北はこの南東からの風が吹き込むと、親潮寒流の冷水塊の海域にさしかかります。平均10℃以下の冷たい海の上には暖かく湿った空気が渡ってくる、海面に触れる下層から冷やされ、含

まれる水蒸気が細かな水滴になり、霧が発生します。暖流の方(南東)から寒流に向けて、高温多湿な風が吹くと、寒流が近くを流れる場所では、霧が発生しやすくなります。これが苫小牧に発生する海霧の正体です。

この海霧はいったん発生するとなかなか晴れず、時には大きな海難事故を引き起こしたり、陸地に入り込み、農作物に被害を与えることも珍しくはありません。また、日常生活では陰湿な気分になる方も多いでしょう。しかし、海霧は夏の訪れを感じさせるものであり、また、霧の中の風景は幻想的で、情緒のあるものです。

これからの季節、また霧が多くなります。苫小牧ならではの海霧、見方を変えて、季節を感じてみてはいかがでしょうか。



◀霧に包まれる大成町付近

苦小牧再発見!!



開拓使美々鹿肉缶詰製造所跡

所在地 字美沢135番地



▲当時製造していた缶詰
(レプリカ)

国道36号線の苦小牧市と千歳市の境界、字美沢にかつて鹿肉の缶詰工場という、地域の特産品を活かした工場があったことをご存じでしょうか。

美々鹿肉缶詰製造所は、北海道開拓使が北海道産業の育成を目的に、ビール、味噌、醤油、紙缶詰などの製造所を各地に建設した一環として、明治7(1874)年に建てられたものです。

鹿肉缶詰は当初、石狩缶詰製造所に製造し、内外に広めたところ評価を得たため、鹿の宝庫といわれた植苗美々地区に、美々鹿肉缶詰製造所を作り、本格操業が開始されました。

当時の缶詰は、鹿の肉を適当に切断して塩を加え、缶を密閉し、約2時間ほど煮てから穴をあけ、水蒸気を噴出させ、これをふたたび密閉して冷水にて冷却する方法で作られ、外国にまで輸出さ

れるほどになりました。

しかし、明治12(1879)年1月から2月にかけて全道的にまれに見る大雪に見舞われ、鹿は動くこともできずに、数10万頭が死に、その姿をほとんど見ることができなくなりました。

この鹿の減少は、缶詰工場には決定的な打撃となり、明治13(1880)年から休業となりました。また、当時の炭田開発や鉄道の敷設などの開発により、捕獲量が一層減少し、もはや再興の見込みはないとの理由で、明治17(1884)年6月12日に正式に廃止になりました。

この製造所は、勇払郡初の近代工業でしたが、その後の産業に影響を与えず、忘れられた存在となっていました。しかし、王子製紙の開業と並ぶ苦小牧の近代工業の足跡が、この地にひっそりとあるといえるでしょう。

◀明治14年の美々鹿肉缶詰製造所



◀現在の製造所跡地
標柱があるのみでその面影はない

苦小牧再発見!!

ハスカップ

ハスカップは苦小牧の特産品としてお菓子やシヤム、ワインなどがあり、また、市のシンボルとして、市の木の花に指定されています。皆さんが目にするのは、加工品が多いと思いますが、ハスカップとはどのようなものかご存じでしょうか。

昔は勇払原野に多くのハスカップの木が自生し、この地域はハスカップの実の産地となっていました。これが地域の特産品となった理由ですが、今は開発などの影響によって、自然の中ではあまり見ることはできず、市内では数件の農家で少量の栽培となっています。

このハスカップの名前は、アイヌ語の「ハシカプ」枝の上にたくさんあるもの」由来があり、正式名称はスイカズラ科クロミノウグイスカグラという長い名前となっています。

6月に淡黄色の



◀ハスカップの実がなっているところ
濃い青紫色で楕円形の実がなる

ラッパ状のかれんな花を咲かせ、7月に15mm程の濃い青紫色の実をつけます。実は独特の酸味があり、ビタミンC、カルシウム、鉄分が多く含まれています。また、強心効果のある成分も含まれているため、アイヌの人たちの間ではハスカップを食べると「身体を軽くし、不老不死に役立つ」と伝えられていました。

最も特徴的なところは、目の老化や疲れ目を予防、改善する効果のあるアントシアニンが豊富に含まれるという点です。アントシアニンを含む果実としてはブルーベリーが有名ですが、それをしのぐ量がハスカップには含まれています。

私たちのふるさとのシンボル「ハスカップ」、不老不死とまではいきませんが、健康に大いに効果のあるものです。甘酸っぱい苦小牧の味、感じてみてはいかがでしょうか。



◀ハスカップの花
6月に淡黄色の花が咲く

▲収穫されたハスカップの実

苫小牧再発見!!

開拓使三角測量勇払基点

所在地 字勇払132番地49

勇払ふるさと公園の北西側に、

三角測量法による北海道地図作成の原点となる、三角測量基点があることを存じてしようか。

三角測量とは、最初に2点間の距離を正確に測定し、三角形の性質を利用して他の点までの距離を計算する方法で、地図作りに利用された測量法です。

◀現在の三角測量基点遠景
中央のガラスケース内に石柱がある



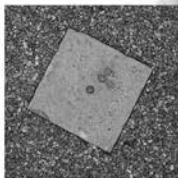
間に基点を設定し、目標台と標石を建てて測量を開始しました。翌年4月にワツソンが陸軍省に転任したため、助手のモルレー・エス・デーが測量を継続し、

デーは天文測量も取り入れ、勇払基点を北緯42度37分34秒、東経141度44分46秒、基線1万4千868.2646mと精測、さらに道

内沿岸部の測量もしました。測量結果は「北海道三角測量報文」として明治9(1876)年にアメリカで出版され、翌年、開拓使から刊行されました。

昭和37(1962)年6月、勇払中学校の北東隣接地より、一辺17m、高さ0.9mの台形の盛土中央から、銅鋳を打った30.3cmの正方形の石柱が発見され、その存在が確認されました。現在のところ鶴川側の基点は不明ですが、この勇払基点は、北海道開拓史上、測量史上貴重な遺跡となつています。

また、現在の生活に重要である正確な北海道地図、その基点がこの地にあるといえるでしょう。



右：博物館展示の目標台と標石の模型
▲左：現在の三角測量基点の石柱上部

◀三角測量法により作成された北海道地図
三角術測量北海道之図（博物館展示）



苦小牧再発見!!

市の鳥「ハクチョウ」

ハクチョウは10月から3月末までウトナイ湖で見られ、誰もが知っている鳥です。また、苦小牧では冬期間にはなじみが深い鳥のため、市は平成2年9月23日に市のシンボルとして「市の鳥」に指定しています。このハクチョウとはどのような生態の鳥がご存じでしょうか。

この鳥はカモ目カモ科に分類される水鳥の一種で、シベリアやオホーツク海沿岸で繁殖し、冬季は温暖な日本などに渡って越冬します。日本にはオオハクチョウとコハクチョウが秋から初冬に飛来し、北海道や本州の湖沼、河川などで過ごし、晩春に再びシベリアなどに帰ります。成鳥は全長140cm、翼長60cmで、

全身白色ですが、固体によつては、頭部や首が黄褐色を帯びていたりします。上くちばし基部から半分以上が黄色で、先端は下くちばしと足は



▲ウトナイ湖に飛来するハクチョウ

黒色で、雄雌同色です。幼鳥は全身が灰色で、上くちばしの基部はやや桃色がかかった白色という特徴があります。

採食は水草の葉、茎、地下茎、果実、落ち穂などを地上を歩きついでむ、草の穂をしゃく、水面にくちばしを入れてこし取る、また、逆立ちで水中に上半身を入れて食べるなどの植物食です。

成鳥の体重は10kgを超え、空を飛ぶ生物としては限界の重さです。そのため離陸時は助走を必要としますが、飛翔時の姿は大型鳥類独特の美しく優雅な様を見せます。

ハクチョウはこの季節になるとウトナイ湖に飛来してきます。そこに冬の使者と

言われるゆえんがあるわけですが、この飛来するハクチョウを見て、冬のブローグを感じるのも一興ではないでしょうか。



◀飛翔のため助走するハクチョウ



◀ウトナイ湖ではハクチョウを間近に観察できます

苫小牧再発見

苫小牧の大火

コイノボリ大火

現在の消防体制では市街地全体が焼ける大火など考えられませんが、苫小牧でかつて市街地全体を焼きつくす大火があったことをご存じでしょうか。

1921(大正10)年5月1日13時20分に三条通り6丁目(現大町2丁目付近)から出火した火は、風速15mの北風にあおられ、当時の繁華街だった本町、幸町、元町を焼き、さらに海岸

にも及ぶ大火となりました。わずか2時間半の間に、町役場、警察、銀行、市場など町の主要施設を含む千7戸を焼きつくし、この火災で当時の金額にして519万5千円という被害を受け、5千350人が家と家財を失いました。

火の回りが早

かったのは五月節句を前に各家庭で「コイノボリ」を立てており、これに火がつき、火だるまとなつて飛び火し、乾燥したマサ



屋根に落ち次から次へと延焼したことが原因で、これがコイノボリ大火といわれるゆえんです。また、当時の消防設備にガソリンポンプ車が1台ありましたが、運悪く当日は分解掃除中で使えず、手押しポンプ3台では手の打ちようがなかったことも、大火となった要因になりました。

この火災被害は、町の復旧起債、町民の不眠不休の努力と王子製紙を中心とする経済力により、わずか1年で復旧しました。また、これをきっかけに繁華街を東側に移し、上下水道の設置、社会教育施設の充実などの新しいまちづくりが始まり、今の苫小牧につながったといえます。

これからの季節は空気が乾燥し、火災が発生しやすくなります。現在の苫小牧市の消防体制では大火ということはありませんが、コイノボリ大火を教訓に、今一度、火の元に注意してみたいかがでしょうか。

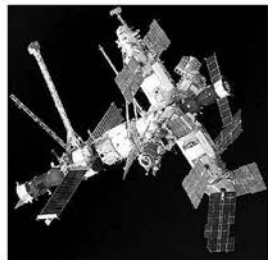


▲開基以来の火災となったコイノボリ大火(大正10年5月1日)

苦小牧再発見!!



宇宙ステーションミール



▲宇宙ステーションミールの全景

苦小牧市科学センターにロシ
ア(旧ソ連)の宇宙ステーション「ミール」と実験モジュール「クバント」の予備機が展示されているのを存じでしょうか。

この宇宙ステーションミールは、1998

(平成10)年に市制50周年を記念し、苦小牧の将来を担う子どもたちのために、

岩倉建設株式会社より寄贈されたものです。

ミールは1986(昭和61)年

2月に旧ソ連が打ち上げた世界初の長期滞在型の宇宙ステーションで、ミール本体には6個



▲科学センター展示のミール



のドッキングポ
トがあり、巨大な宇宙構築物を作ることに成功しました。また、無重力環境でのさまざまな実験を行い、大きな成功を収めま

した。しかし設計寿命である5年間をはるかに超えた15年の運用で老朽化し、2001(平成13)年3月23日14時57分、ニュージーランド東方2千kmの南太平洋に落下しその使命を終えました。ミールが打ち上げられてから、延べ百人以上の宇宙飛行士が滞在し、最終的に地球軌道を8万6千331回周りました。

科学センターに展示されているミールは長さ13.13m、幅4.15m、重量20.4tで、実際に宇宙に行ったものと同型の予備機ですが、宇宙のミールがなくなつた現在では、たいへん希少価値の高いものです。また、機内に入れるなど、自由に見学することができます。

このミールは質感や細部といい、さすが本物で迫力満点です。みて、触れて、果てしない宇宙や、宇宙での生活に思いをはせてみてはいかがでしょうか。



◀居住区から見た操縦区(左右対称にコンピュータが並んでおり、体を固定して座れるようになっている)

苫小牧再発見!!

ブロンズ像「緑の環」

苫小牧市内5カ所に「人間環境都市・緑の環」と台座に書かれたブロンズ像があります。そのうちのいずれかは、多くの人は見たことがあると思いますが、このブロンズ像は何の目的で建てられたかを存じてでしょうか。

苫小牧市は、昭和48年11月17日に人間を主体とした公害のない、健康で安全な新しいまちづくりを目指し、「人間環境都市宣言」をしました。このブロンズ像は、人間環境都市のシンボルとして、昭和49年11月3日の文化の日に建立したもので、本道出身の彫刻家本郷新の作品です。特徴としては、高さは310cm、



◀苫小牧駅前の「緑の環」
長年にわたりまちの発展を見続ける

台座520cm、全高830cmの大ききで、

平和のシンボルであるオリーブを両手で天にかかげている裸婦像です。オリーブの葉は緩やかなカーブとなり、苫小牧をくると緑の環で囲む

という意味が含まれています。

この「緑の環」像は、苫小牧市民一人一人が理想都市創造への新たな決意という願いを込め、市役所前の広場、国道36号線沿いの字美沢、字樽前、苫小牧駅前広場にそれぞれ建立しました。5基目は国道235号線の移転計画の関係により、平成5年に字静川の国道沿いに建立しました。

現在の苫小牧は、昭和49年の人口12万9千人から、平成20年には17万4千人と大きく発展し続けてきました。また、多くの緑に囲まれ、恵まれた都市環境になってきています。

この像は約35年にわたり苫小牧の発展や出来事を眺めてきたことになりました。が、これからも苫小牧が理想の都市になることを願い、見守り続けることにしましょう。



▲市役所北側玄関前の「緑の環」



◀字樽前国道沿いの「緑の環」
樽前山を眺める位置に立つ

苫小牧再発見!!

アイヌ丸木舟および推進具



▲博物館2階に展示のアイヌ丸木舟および推進具

苫小牧市博物館内に北海道の指定文化財である有形文化財「アイヌ丸木舟および推進具」という貴重な展示があるのを存じてしようか。

このアイヌ丸木舟などは、1966(昭和41)年7月、沼ノ端の元稔橋下流80mほどの旧勇払川右岸から発掘されたもので、鎌倉時代末から室町時代初期(1300年代)にアイヌの人々が製作、使用したものと考えられています。

見つかった5艘の丸木舟は1本の大木を半分に割ってくり抜き、鯉節型に成型したもので、全長約8m、幅約80cmとたいへん大きなものです。3艘は河川用の丸木舟(子ブ)で、残り2艘は、両舷に波除けの板を張るため、多数の穴を開

けた漁労や航海に使用する板綴船(イタオマチブ)でした。舟の一部には彩色されたアイヌ民族特有のアイウシ紋の彫刻が施

されたものや櫂、棹には家紋(イトクバ)や所有印(シロシシ)が施されています。

また、1992(平成4)年に千歳市美々8遺跡低湿地部の調査において、丸木舟や板綴船をはじめ、櫂、棹などが出土しました。これにより、美々8遺跡を拠点とする集落(コタン)から板綴船に乗り、美々川、ウトナイ沼、勇払川を下り、太平洋に出て漁をしていたと推測されています。丸木舟の出土した沼ノ端は、この中継地として機能していたと考えられています。

係留されていた丸木舟は、1667(寛文7)年の樽前山噴火により一瞬にして埋没したもので、全国的に珍しく、民俗学上貴重な資料になっています。

この展示は約600年もの昔を知る貴重な遺産です。見学して昔の様子を想像することも、歴史を感じるひとつの楽しみです。



◀板綴船による漁の様子
江戸幕府役人 村上嶋之允によって描かれたもの



◀板綴船(イタオマチブ)の模型
中央に見える丸木舟に波除けの板を張っている

苦小牧再発見!!

サケの上る川・錦多峰川



▲錦多峰川に上るサケの群れ

秋の風物詩であるサケの遡上さくしやうじやうといえは、千歳市の千歳川と考える方が多いと思いますが、苦小牧市西部の錦多峰川でも、サケの遡上を見ることができのをご存じでしょうか。

錦多峰川のサケの遡上は、毎年9月ごろから見られ、最盛期には川いっっぱいになるほどの風景が見られます。川ではふ化事業のため、サケの捕獲が行われており、平成20年の実績では、捕獲数が2万2千883尾、採卵数が897万5千粒となっています。

採獲されたサケは雄、雌に選別され、市場などに出荷されることも、採卵用のサケは、苦小牧漁業協同組合の錦多峰サケ・マスふ化場に運ばれます。その後、採卵された卵は人工ふ化させ、翌年の5月ごろ錦多峰川上流域に放流になります。

サケは生まれた川に戻るといことは誰もが知って

いることと思いますが、その生態はいまだ謎の部分が多い魚です。サケの一生は、まず、冬に川で生まれ、春に川を下って海へと旅立ちます。その後、3〜4年をかけてアラスカ付近まで旅をし、自分の生まれた川へ産卵のために戻り、その命を終えるという特徴を持っています。

サケがふるさとの川に戻るといふことに、多くの人が興味を持ちます。それは生まれた川の匂いを覚えており、それを頼りにしていると言われていますが、それ以上に、ふるさに戻るといふ特徴に、郷愁あなごころを感じ、共感があるからではないでしょうか。長い旅路の末、ふるさとの川に戻り、最後の力を振り絞って産卵し、そして死を迎える「ふるさとを愛するサケ」。

錦多峰川でそのサケの不思議の一端を眺め、苦小牧の秋を感じてみてはいかがでしょうか。

◀錦多峰川の様子
中央に見えるのがサケ捕獲装置「ウライ」



◀美原町と宮前町の境の橋では、サケの遡上を見学できるスペースがあります

苦小牧再発見!!

宮沢賢治と苦小牧

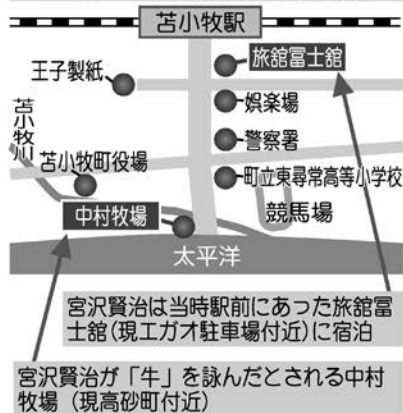
「雨ニモマケズ」、「銀河鉄道
の夜」、「風の又三郎」などの代
表作が有名な、詩人で作家の宮
沢賢治と聞くと、誰もが耳にし
たことがあると思います。この
宮沢賢治が大正時代に苦小牧を
訪れ、苦小牧の風景を詠んだ詩
を残していることをご存じでし
ようか。

1924(大正13)年5月、当
時、岩手県の花巻農学校の教師
であった賢治は、修学旅行で北
海道に生徒を引率してきました。
小樽、札幌の後、苦小牧を訪れ、
5月22日に「牛」という詩を詠
みました。

牛 (春と修羅・第二集から)

一びきのエーシャ牛が
草と地氈^{もも}に角をこすってあそんでゐる
うしろではパルプ工場の火照りが
夜なかの雲を焦がしてゐるし
低い砂丘の向ふでは
海がどんどん叩いてゐる
しかもじつに掬^くつても呑^のめさうな
黄銅いろの月あかりなので
牛はやっぱり機嫌よく
こんどは角で柵を叩いてあそんでゐる

1924(大正13)年当時の苦小牧駅周辺



▲宮沢賢治 岩手県花巻町生まれ
(1896年～1933年)

この詩こそが、苦小牧での詩
といわれ、明治末期から乳牛(エーシャ種)を飼育していた中
村牧場付近(現在の高砂町付近)
の風景を詠んだとのこと。
当時、賢治が苦小牧でどのよう
に歩いたか、記録などがないた
め推測するしかありませんが、
駅からの道が海に続き、中村牧
場があったので、ここを歩き、
この風景から「牛」が生まれた
のではないかとされています。
苦小牧にちよつとしたゆかり
のある宮沢賢治。秋の夜長、宮
沢賢治などの本に親しんでみて
はいかがでしょうか。

苦小牧再発見!!

知られざるマッチ産業



▲明治期に生産されたマッチ

苦小牧は紙のまちというイメージがありますが、紙のまちとなる以前、マッチ産業で栄えたという歴史があることをご存じでしょうか。

苦小牧でのマッチ産業は、明治27年から明治40年ごろに栄え、マッチの軸木、小箱の生産が行われました。軸木は北海道のド口の木(白楊樹)が良質であり、特に苦小牧地方は、ド口の木が豊富で良質であったことから生産が始まりました。小箱はエゾマツを利用して小箱素地を作製したところ、価格が安いこともあって大いに売れ、苦小牧において大産業に成長しました。

特に明治37年には大いに栄え、10数の工場が、美々、植苗、勇



◀苦小牧のマッチ軸木製造所の様子

振沢、勇振、丸山、錦多峰、覚生、樽前などに設置されるまでになりました。明治43年9月に操業を開始した王子製紙苦小牧工場の当初の職工数

403人に対し、同年同月の苦小牧の全マッチ工場の職工数は、690人とこれをはるかに超え、当時の繁栄を知ることができます。

当時の生産品は、半製品の状態で神戸に移出してマッチに仕立て上げ、その内80%は輸出用として神戸港から中国、韓国、インド、ロシアなどに販売され、苦小牧の生産品が世界各地に販売されるまでになりました。

しかし、このマッチ工場も時代とともに、大手メーカーの経営方針の変更ににより、山元での工場は必要ないと判断され、苦小牧のマッチ工場も大正時代をもってそのほとんどが姿を消し、今ではその面影も感じられなくなりました。

現在の生活では火をつけるのにマッチを使用することが少なくなりましたが、時代の流れとともに使わなくなつた道具や物にも、まちの歴史が隠れているといえるでしょう。



◀当時のマッチ小箱(エゾマツ材で作られており、箱の中に木目が見える)

苫小牧再発見!!



工業のまち苫小牧の出発点

現在の苫小牧市は多くの企業が進出し、工業のまちとして発展を続けていますが、工業都市としての始まりはいつかご存じでしょうか。

苫小牧における工業開発は、明治43(1910)年の王子製紙苫小牧工場の操業開始から始まりました。明治37(1904)年に王子製紙は支笏水系とその付近の原料であるエゾ松、トド松に着目し、この地域に新工場を建設することになりました。

当初は千歳が工場建設予定地でしたが、その後の調査と送電技術の新開発によることや、苫小牧が太平洋岸に面し、北海道成鉱鉄道の便もあること。工場用地が安価、工業用水も豊富であることなどにより、苫小牧への工場建設が決定になりました。

一時は千歳に工場が建つものと考えられていた住民

も苫小牧決定に大喜びし、村民有地の無償譲渡と工場建設使役人1千人を申し出るほどの盛り上がりとなりました。

当時の苫小牧は漁業、林業などを中心とする1次産業のまちでしたが、これにより2次産業のまちへと変貌し、一大変革となりました。そして、このことで勇払原野に工業開発の拠点が生まれ、多くの人々が集まり、当時はさびしい漁村であった苫小牧村は工業都市として出発することになりました。

この王子製紙苫小牧工場の進出をきっかけとして、現在の苫小牧市はさまざまな製品の工場が進出し、全国的にも有数の工業のまちとなっています。本年9月には王子製紙苫小牧工場が操業100周年を迎えるとともに、苫小牧市も寒村から脱却し、「工業のまち」という新しい歴史が始まって100周年を迎えるといえるでしょう。

◀明治44(1911)年本格操業に入った王子製紙苫小牧工場



現在の王子製紙苫小牧工場の様子▶

苦小牧再発見!!

とまこまい港まつりの歴史



苦小牧の夏のビックイイベントとして、「とまこまい港まつり」が毎年ありますが、この港まつりには長い歴史があることをご存じでしょうか。

◀昭和27(1952)年
第3回観光まつりの様子



港まつりの歴史は、現在とは名称が異なる昭和25年9月の「観光まつり」の開催から始まりました。当時は市民全体のレクリエーションとすることや苦小牧市の経済圏を近隣町村に拡大することを目的にシヤンソン発表会や花火大会などが行われ、大いに盛り上がりを見せました。しかし、開催を重ねるにつれ、毎年の行事内容や開催意義からみると、期待した成果はあげられず、観光まつりの本質、苦小牧の持つ観光価値などを再認識しなければならなくなりました。

この観光まつりとしての行き詰まりとともに、昭和26年に苦小牧工業港起工式が行われたこともあり、名称を「港まつり」と改め、イメージ

チェンジをして昭和31年に再出発することになりました。

第1回港まつりは、仮設舞台を東小学校横広場に設け、船団パレードなどの新しい催しもありました。港のない港まつりであり、観光まつりの延長的な感じが強くありました。

港まつりが本当の意味での港まつりとなったのは、昭和38年の第8回であり、この年には苦小牧港の開港記念式典がまつり開催期間中に行われ、当時の市民は港まつりの実感を始めて味わいました。

その後、港まつりは年々本質や内容が充実し、現在では市民おどりなども取り入れ、市民全体のレクリエーション的な役割を果たすまでになりました。

今年も港まつりが開催されます。苦小牧を特徴づけるこのまつりで、まちの活力を感じることにも、夏を満喫してみたいかがでしょうか。

▶現在の港まつり(第54回)
市民おどりの様子

◀昭和31(1956)年
第1回港まつりの様子



苫小牧再発見!!



市営バス創業60周年

日ごろ利用したり、市内で見かける市営バスですが、今年で創業60周年という節目の年を迎えることをご存じでしょうか。

市営バス創業のきっかけは、70年前の昭和15年にさかのぼります。当時の苫小牧は工業地帯の造成を旗印に工業港を築港すべく大運動を展開しており、同時期に勇払で大日本再生製紙（日本製紙）の立地がありました。そのため、町役場は勇払の工場建設と操業に伴い、勇払地区の人口増加と発展を予想し、勇払沼ノ端間に交通機関がないという不便を解消しようと、公営バスを作るうとしました。しかし、戦争の激化によってやむなく中止という結果になりました。

その後、公共交通を整備し、市民生活を便利にしようとして昭和23年市制施行以後も継続して運動が行われ、市は昭和25年度からバス事業を開始することに決定しました。



◀昭和35年当時の市営バス

昭和25年8月24日には市営バス運送事業開業式が行われ、翌25日にはえんじ色とコバルト色のツートンカラーの市営バス3台が市中にお目見えし、運行開始となりました。

運行第一日目の収入は、わずか4千805円、利用者28人と振るわず心配されましたが、すぐに収入も利用者も順調に伸び、運営は軌道に乗りました。その後、市の発展とともにバス網の拡充がされ、時代の変化とともに現在の状況になりました。

市営バスは当時の人々の「不便さを解消し、市民の足としたい」との思いで創られたものです。今年、市営バスは創業60周年を迎えます。時代の変遷とともに、その姿は形を変えていくことになりましたが、これからも創業当初の人々の熱い思いを乗せて走り続けることになるでしょう。



◀昭和25年最初の市営バス路線図

当時は市内4線、支笏湖線、千歳線、日高線、勇払線の8線であった



▲現在の市営バス

苫小牧再発見!!



市の木「ナナカマド」

苫小牧市の木として指定され、街路樹として一般的な「ナナカマド」ですが、この木の名前の由来をご存じでしょうか。

ナナカマドはバラ科の落葉高木で、高さは7〜10m程度になり、6月〜7月に白い花を咲かせ、10月には光沢のある赤い実をつけて紅葉します。赤く染まる紅葉や果実が美しいので、北海道や東北地方では街路樹としてよく植えられ、多くの市が市の木に指定しています。

◀ナナカマドの花 6〜7月に白い花を咲かせる



苫小牧市でも緑化思想と自然保護の高揚を図るため、昭和48年に市の木に指定されました。また、市の気候や風土に適しているため、街路樹に多く用いら

れており、秋の紅葉は特に美しい風景となり、市民に親しまれています。

ナナカマドという名前の由来は、大変燃えに

くく、7度かまどに入れても燃えないということから付けられたという説が広く流布しています。また、そのほかに7度焼くと良質の炭になるとい説や、食器にすると壊れにくいことから、かまどが7度駄目になるくらいの期間使用できるという説があり、そこからこの「ナナカマド」という名前が付いたと言われています。

これからの季節、ナナカマドは鮮やかに紅葉し、赤い実をたくさん付けます。しかし、日本に生息するナナカマドの実の味が苦いため、ジャムなどの材料にはできないといわれています。

市内でも、市の木「ナナカマド」は日々の生活の中で何気なく目に入ります。ナナカマドを実際にかまどに入れて、名前の由来を試してみることはできませんが、その名前の中にも樹木の特徴が隠されており、身近なところでの再発見がここにもあるといえるでしょう。

▶ナナカマドの実

秋になると赤い実を付け、鮮やかに紅葉する



苫小牧再発見!!

発行：平成25年3月31日

発行者：苫小牧市教育委員会

編集者：苫小牧市教育委員会 スポーツ生涯学習部

住所 苫小牧市旭町4丁目4番9号 電話 (0144) 32-6752



Rediscovering TOMAKOMAI

